

## 自然の改変

最近問題になっている環境問題は、この人間による「自然の対象化」にその源を發します。古代から人間は、その生活空間をより安定したものにするため、手を加え、自然を利用して生きていました。しかし、近代以降、その規模と速さが急速に増していきます。自分自身から切り離して目の前に置いた自然は、当然、人間によって手を加えられることになるわけですが、人間も実はその自然の中の一生物であるということには変わりがありません。ここに、人間による自然の改変が、人間を除く自然のみならず物である人間自身にも影響を及ぼすに至ったのです。

## 問題群としての近代

実は、人間の「理性」や「科学」の輝かしい勝利を示したかのように見えた「近代」は、さまざまな問題を孕んだ時代であることが、人々の共通の認識となったのは、二十世紀に入ってからのことでした。

「科学」は人々に幸福をもたららし、苦しい労働から解放し、病苦から救い、便利さをもたらしたように見えました。しかし、二つの

## 環境問題

↓地球温暖化・オゾン層破壊・熱帯林の減少・野生生物種の絶滅・酸性雨・大気汚染・水質汚濁・砂漠化・産業破棄物の越境移動など、近代になってからの人間活動の拡大によって顕著になった、人間を取り巻く環境をめぐる問題。

## 問題群

↓さまざまな問題の集まり。

認識 (P. 44)

世界大戦、そして核兵器の悲惨<sup>ひきん</sup>さ、地球上の生命の絶滅の可能性は、まがいなく科学が作り出した逆説だったので。つまり、人の幸福を実現してくれるはずの科学が人を不幸に陥れるように作用するということです。また、「公害」や人間味を失ってしまったさまざまな工場生産、クローン問題、産業廃棄物中のダイオキシンの存在、オゾン層の破壊、車公害等々、数え上げればきりがありません。

「医学」の発達こそは、人間を病魔から救ってくれた、と考えられますが、同時にMRSAの出現は、本質的な「医学」の矛盾を顕現させています。病気をなおすのでなく、病院が原因となって、病気が広まって行くからだと思われます。これも逆説的です。

「栄養のとりすぎによる肥満」や「コンピュータによるバーチャル・リアリティだけがすべてで、現実感がなくなること」などはどうでしょうか。

また、「近代」になって人口が都市に集中して、その中で群衆の中で個人が「孤立化」する問題、マスメディアの発達が、多重の情報をたれ流しにするが故に、人々が情報に無感覚になって、情報をただただ、自分の体の表面にシャワーのようにたれ流し反応しなくなってしまうことなど……。考えれば考えるほど、「近代」は、人間に

### 逆説 (P. 88)

#### 公害

↓ 一企業が生み出した環境破壊で「私害」。

#### クローン

↓ 遺伝子操作による動物複製。

#### MRSA

↓ メチシリン耐性黄色ブドウ球菌。抗生物質に耐性を持ち、院内感染の原因菌として問題になっている。

#### バーチャル・リアリティ (P. 142)

#### マスメディア (P. 137)

#### 情報のシャワー

↓ マクルーハンの説。

対して、「問題群」として迫って来ているように考えられますし、ここから脱出することは多大の困難を伴っているように思われます。  
 ……

### ポストモダン

「科学」を基幹とする「近代合理主義」は人々に新時代の到来を感じさせ、その成果は物質的な豊かさとして、少なくともいゆる先進国の人々には多大な恩恵をもたらしました。しかし一方で、それは、以上みてきたようなさまざまな問題をつきつけ、また「人間疎外」と呼ばれる状況さえ生み出しています。

そこで、これまで人々が信頼し、絶対視さえしてきた「合理主義」の時代としての「近代」を相対化し、乗り超えようとする思想傾向が生じ、一般に「ポストモダン」と呼ばれています。

### 近代合理主義 (P. 98)

#### 人間疎外 (P. 109)

↓人間が本来あるべき人間らしさを失った非人間的状態。

#### ポストモダン

↓脱近代。

# コ ラ ム

## (1) 無意識

精神分析学の祖、ジグムント・フロイトは、人間の行動の中に、日常生活に於ける錯誤（たとえば、「言いまちがい」の如き）や、夢の中の行動のように、人間の意識（＝何か目的を決めて、それを了解すること）したものでないものがあることを発見しました。そして、それを、「無意識の行動」と名付け、分析していきました。その結果が『日常生活の錯誤』『夢判断』（フロイト著作集、日本教文社、岩波文庫）として上梓（出版すること）されました。

このように、近代という時代は、人間の意識の及ばない部分へも、いわば「意識と言語の光」を当てて、意識化し言語化していくことを通して、あらゆるヘモノ・コトを、人間の意識が科学的に、理性的に把握しようとしたのです。

その点では、ユダヤ人フロイトの「弟子」の中で唯一のドイツ人のユングが、どのようにしても理性が及ばぬ部分を人間精神が持つことを指摘し、フロイトとは別れてユング流の精神分析を創り出した（「共同的無意識」「原型」理論等）ことを考え合わせた時、この分野でも、近代や二十世紀が「科学主義・理性主義対（神秘主義的）反科学主義」の時代であったことが理解できると共に、ドラマチック（芝居的）でドラスチック（激動的）な世紀であったことも、確認できることとなります。